

九州大学病院が「福岡県てんかん支援拠点病院」に指定されました —てんかん患者さんを適切な診療につなげることを目指します—

2023年1月23日

九州大学病院

ポイント

1. 九州大学病院は、2023年1月23日に「福岡県てんかん支援拠点病院」として指定されました。
2. てんかん支援拠点病院として、てんかん患者さんを適切な診療につなげるための各診療科間・各医療機関間の連携を強化する役割を担います。
3. 医療機関等の職員の専門性を高めるための研修や、てんかんへの正しい理解を深めるための情報発信等を実施することにより、県内におけるてんかん診療連携体制の整備を進めます。

概要

てんかんは、突然けいれんして意識を失う、けいれんしなくても意識だけを失う、などの「てんかん発作」を繰り返し起こす病気で、約100人に1人が発症し、患者数は全国で約100万人、福岡県では約4万人の患者さんがいると推計されています

てんかんは、乳幼児から高齢者までいずれの年齢でも発症し、約3割が薬の効きにくい難治性てんかんです。的確な診断のためには長時間ビデオ脳波モニタリングが必要なことがあり、難治性てんかんには手術が有効な場合があります。また高齢発症のてんかんは、認知症との鑑別が必要な場合もあります。てんかんに対しては、小児科、脳神経内科、脳神経外科、精神神経科等の診療科が、それぞれの専門性に基づき診断と治療を担いますが、年齢によって最適な治療や必要な支援も異なるため、診療科間の連携が重要です。そのため、専門的な治療や支援に関する情報共有や、医療従事者の資質向上、地域差の解消等が課題となっています。

厚生労働省では2016年より各都道府県において、てんかん診療の均てん化を目指し、てんかん診療を専門的に行う医療機関のうち、1か所を「てんかん支援拠点病院」として指定し、専門的な相談支援や医療機関間の連携、地域における普及啓発等の体制を充実させ、適切な医療につながる地域の実現を目指す「てんかん地域診療連携体制整備事業」を推進しています。また、世界保健機関(WHO)では、2022年5月に、Intersectoral global action plan on epilepsy and other neurological disorders (IGAP) (領域横断的なてんかんと神経疾患の世界的行動指針)が承認され、「てんかん患者の90%がてんかんは治療可能な病気であることを知り、80%が適切な抗発作薬を享受することができ、70%が良好な発作コントロールを持つことを目指す」という行動計画が示されました。このような状況から、本年1月23日に九州大学病院(病院長:中村雅史)は「福岡県てんかん支援拠点病院」に指定されました。

九州大学病院は、てんかん支援拠点病院として、てんかん患者さんを適切な診療につなげるための各診療科間・各医療機関間の連携を強化するほか、医療機関等の職員の専門性を高めるための研修、およびてんかんへの正しい理解を深めるための情報を発信することにより、県内におけるてんかん診療連携体制の整備を進めてまいります。

<お問い合わせ>

脳神経内科 重藤寛史 e-mail: shinkein@med.kyushu-u.ac.jp